関西学院大学 20 年の思い出

木　野　光　司

定年まで数ヶ月となった今、コロナ禍で外出の少ない時を過ごしていると過去を振り返ることが増えた。生活の大きな変化は勤務先の変更に連動していたように思える。「ＫＧゲルマニスティク」退職記念号に原稿を書かせていただく機会に 40 年余りの教員生活の思い出を簡単に綴らせていただく。

関西学院大学赴任までの 22 年

最初の就職先は奈良県橿原市にある県立医科大学進学課程だった。修士論文の審査を終えた後に主任教授からこの話を伺い、その後の採用手続きを経て助手に採用された。1979 年 4 月に赴任し、最初の 1 年は故大原先生、その後は本田先生の下でドイツ語を担当した。1984 年 9 月から 1 年間 DAAD 奨学金で西ドイツのバンベルク大学 Wulf Segebrecht 教授の所に留学させていただいた。今思えば未熟なドイツ語教師であったが、8 年間なんとか無事に勤めた。

次の就職先は大阪市杉本町にある大阪市立大学文学部だった。前年にお話を頂き、1987 年 4 月からドイツ語等を担当した。独文教室のメンバーは 16 名で、全学ドイツ語と文学部独文科の専門授業を担当していた。論客の先生方が多く、金曜日午前 11 時からの教室会議の賑やかさが印象的だった。赴任して 1 年目は比較的穏やかだったが、2 年目の春に薗田教授が阪神ドイツ

文学会会長になられ、私は会計事務を任されて忙しくなった。また1990年代には学部改組案が浮上し、独文教室分割の話が出て対策に追われた。また各教員には業績の積み上げや博士号取得も求められるようになり、授業、会議、論文執筆等で忙しい日々が続いた。

2000年春に関西学院大学の先生から関学に赴任する意思があるかという打診を頂いた。すでに13年間市大に勤めていたので、新しい環境に移る意思がある旨の回答をし、独文教室代表にその旨を報告した。ところが市大文学部が文科省に教員氏名を貼り付けた改組申請を出す時期だったようで、転出しないよう強く求められた。しかし、申請期限が迫ると一転して関学での採用手続きを早く進めることを求められ、関学の先生に無理を願って人事手続きを早めていただいた。2000年度は転職を巡る紛糾で苦しい年だった。

関西学院大学での20年

2001年4月1日が日曜日だったので、4月2日に関学での就任式に赴いた。最初の就職の時は京都市内の下宿から橿原市のアパートへ、市大への転職の時は橿原神宮前の公務員宿舎から生駒市のマンションへの転居が伴っていた。しかし、市大時代に四條畷市郊外の分譲地に住宅を建てていたため、今回は片道2時間かけて上ヶ原へ通勤することになった。その時の教室メンバーは宮坂豊夫、鎌田道生、西谷俊昭、倉賀野安英の各先生であった。その後2004年3月に宮坂教授が定年退職され、小川暁夫教授が赴任された。同年9月にAndreas Rusterholz教授が文学部宣教師としてスイスより赴任され、独文教室の6人目のメンバーとなられた（後に文学部宗教主事になられた）。2009年3月に鎌田教授が定年退職され、村山功光教授が赴任された。2012年3月に西谷教授が定年退職され、宮下博幸教授が赴任された。2017年3月に倉賀野教授が定年退職され、宇和川雄准教授が赴任されて今日に至っている。

時とともに年長者が退き、新しい教員が加わって独文教室は続いてきたが、この間の関学生活で印象的だったことを記しておきたい。赴任した 2001 年 4 月には鎌田教授が学部長に就任されていた。その前年 4 月から阪神ドイツ文学会会長に就いておられた鎌田先生は大変忙しく、2002 年 4 月会長に再選された際に私は庶務幹事として学会の事務を担うことになった。また 2003 年 4 月からは曽我祐典研究科長、大鹿薫久教務学生主任の下で教務学生副主任になった。その後 2006 年 4 月に阪神ドイツ文学会編集担当幹事となり、関学での最初の 5 年間も忙しい時期となった。

その後、2008 年 4 月から 1 年間頂いた「学院留学（長期）」は、貴重な研究休暇になった。同年 4 月から 8 月末までベルリンのフンボルト大学 Hartmut Böhme 教授の所で文化学 Kulturwissenschaft の研究をさせて貰った。同年 9 月から翌年 3 月まではミュンヒェン大学日本学科 Japan Zentrum の Evelyn Schulz 教授の所でミュンヒェン文化史の文献を読み始めた。この時に始めた研究が後の「バイエルン王国」研究につながり、2015 年 4 月から 9 月まで再度シュルツ教授にお世話になって「バイエルン文化史」の研究を深めることができた。

ドイツでの研究休暇は充実した楽しいものだったが、それを終えて帰国した 2009 年春からまた慌ただしい日々が始まった。2009 年 4 月に学部長になられた大鹿教授の下で学生主任になり、学生の休学や退学の際の面接等の業務を始めた。それだけなら普通だったが、すぐに学生の訴えへの難しい対応に追われることになった。その後も別の学生たちが事故や事件を起こしたため、弁護士事務所や警察署に足を運ぶことが続いた。

同時期の 2009 年 5 月からドイツ語学文学振興会理事、翌 2010 年 4 月から阪神ドイツ文学会編集長と日本独文学会支部選出理事、2012 年 4 月からは阪神ドイツ文学会会長など学外の仕事が連続した。学院留学後の 2009 年 4 月から 2014 年 3 月までのこの 5 年間は私の教員生活で最も忙しい時期だったように思う。その後の現在に至る数年間も色々な仕事や問題が続いたが、なんとか無事に定年を迎えられそうな様子である。

忙しかった思い出ばかり書き連ねたが、関学に赴任して最もやりがいがあったのは日々の講義や演習であった。ドイツ文学・文化というマイナーな学問領域の講義を 200 人もの学生が聴講してくれるという希有な経験もさせていただいた。また毎年 10 名余のゼミ生を迎え、2 年間のゼミ活動を経て、彼らが卒論を書き上げるのを手伝うという演習の仕組みは、赴任当初こそその運営方法に戸惑ったものの、慣れるに従いとてもやり甲斐のあるものになった。

最後にお世話になった方々に御礼を申し上げて拙文を閉じる。人なつっこくて賢い学生たちのお蔭で、私の 21 年間の関学での教員生活は楽しく恵まれたものになった。今年度最後の演習を担当している 3 年生を含め 21 期 240 名に上る「木野ゼミ」の学生たち、そして拙い講義や授業を寛大に聴いてくれた独文専修の学生や院生たちに心より感謝したい。また、私の手に余る学会事務局の仕事やドイツ語検定などの仕事を手伝ってくれた歴代の教学補佐たちにも感謝したい。ここにすべての方々の名を挙げることは不可能であるが、様々な形で親しくお付き合いいただいた文学部の先生方、親切な職員の方々、独文専修の同僚の先生方にこの場を借りて御礼申し上げたい。

【付記】2021 年 5 月 30 日に大鹿薫久先生がご逝去された。上述の様に大変お世話になった先生が思いがけず逝去され哀しい思いをしている。大鹿先生のご冥福を心よりお祈り申し上げる。